

## 巻頭言

中央大学附属中学校・高等学校

学校長 木川裕一郎

(中央大学法学部教授)

『教育・研究』第三三号に掲載された論考は、中央大学附属中学校・高校に所属する教員の教育・研究の成果であり、本校が今後発展してゆく原動力となる。

高校では、二〇一七年度から新カリキュラムが適用され、二〇一八年度にはその目玉である「教養総合」科目が二年生を対象に動き出し、二〇一九年度には、三年生を送り出して、新カリキュラムの完成年度を迎えた。また、二〇一八年度からスーパーサイエンスハイスクール指定校となり、これによりもたらされた教育環境は、総合学習の必要性を十分に斟酌した教育を飛躍的に進展させている。さらに、教育環境の変化は、確実に附属中学での教育にも及びつつあり、特に、研究旅行や修学旅行の事前準備や事後的学習には、調べ学習への期待と成果を垣間見ることができるといえる。本校の広報戦略においても、大学での教育に接続する高校教育を大学ゼロ年生教育と位置付けて、大学での教育研究の意義に対する理解を生徒に求めることの重要性を社会に示しているところである。

しかし、こういった教育の改革を担うのは、言うまでもなく教員である。総合的学習では考え方の筋道が重視される結果、教員たちは、個々の生徒たちの様々な価値観と向き合わなければならぬ。これは、非常に時間と忍耐力を要する作業である。また、自然科学と社会科学、あるいは人文科学の融合を前提とする総合学習により、教員は、教科の枠を超えて生徒に対して指導をおこなうことになるために、社会の動向を見据えつつ、様々な領域に関する知見が必要となつてこよう。私は、二〇一七年度に公開された『教育・研究』第二一号の巻頭言において、新たに動き出す教養総合により、我が校の中等教育は大きな質的転換を経験すると述べさせていただいたところである。こういった本校における教育環境の変化は、教員の教育・研究活動に大きな刺激を与えていることは間違いない。すでに、本号には、そのような変化を実感させる、非常に興味深くかつ極めて示唆的な論考が収められている。この優れた教育研究の成果が最終的に本校の生徒たちあるいは卒業生の活躍へとつながる日が待ち遠しい。

最後に、昨今は働き方改革が問われるなか、業務負担の軽減が遅々として果たせずにいるのはひとえに私の責任に他ならないが、それ

にもかかわらず、時間と精神力を惜しむことなく、本号にご論稿をお寄せいただいた教員の方々には改めて謝意と敬意を表したい。また、遅滞なき発行のため、きめ細やかに編集作業を進めてこられた金井利浩教諭には、心より御礼を申し上げる次第である。